ブラジル系教会の場合

—— 適応と自立のはざままで ——

星野 壮

日本における在日ブラジル人の生活実態は、「顔の見えない定住化」という梶田孝道らが提出した言葉で十分言い表せよう。すなわち彼／彼女らは、「そこに存在しつつも、社会生活を欠いているがゆえに地域社会から認知されない存在」である。なぜそのような状況なのだろうか。もちろん、集住地域においても半数以上の日本人市民が外国籍住民との「共生」を現実的と考えがちであることが一つの原因である。しかし、同時に入管法改正から二〇年が過ぎた今日、ブラジル人側もその間に作り上げたエスニック資源に依存しがちで、日本人との交流を求めてこなかったこともあるかと思われる。

このような状況下で、日本人研究者が集住地域のブラジル人が集う教団——たとえばペンテ（コステ）派教会・心霊主義教団・日本の新宗教教団など——を調査して看取される特徴とは、①地域社会とは没交渉のエスニック・チャーチ（EC）であること、②日本側の宗教集団内では、（日本人側から見れば）強固なエスニック・バウンダリーの向こう側の存在であること、③ブラジル系教団の日本人布教の不全状態、などである。ブラジル人信徒側もむしろECの閉鎖性にひかれ、ペンテ派などに通うようになることを指摘する先行研究も存在する。また、実際に発表者が行った調査票結果からもその傾向は伺える。しかしECという支配的様相から漏れ出てくる事例が看取

できるのも、また事実である。

ヤマザキ氏（仮名）は、来日して二〇年になる。ブラジルではカトリック教会に通っていたが、妻の熱心さに負けて日本ではブラジル系のあるペンテ派教会に通っていたという。ところが、日本で生まれた子どもが日本語の方が得意になったこと、またキリスト教やブラジルの宗教的・文化的知識を全く知らないことから、ポルトガル語で行われる集会の内容を理解しないことが悩みとなった。彼はこれが理由となり、妻と子どもを連れだつて日本人福音教会への参入を決意する。そして彼は「子どもたちには、日本で日本語でリバイバルを実現して欲しい。日本にいる限り日本の教会に行った方が良いと思います」といった新たな希望とも、自分たちのポジショニングを正当化する語りとも思われるような語りをするようになっていく。

心霊主義教団のリーダーであるモリ氏と子どもたちを指導するサトウ氏（ともに仮名）は、子どもたちへの教義教育をポ語と日本語の二カ国語で行っている。モリ氏自身の子どもを含め、日本語しか喋らない子どもや日本語の方が得意な子どもが多数を占めている。このような状況下においてはやむを得ないという。また、彼らも子どもたちが宗教的・文化的知識を持っていないことに危機感を持っている。サトウ氏は「理解してくれば日本語でも構わないし、この子どもたちが将来日本語で日本にも教えを広げてくれれば」と危機を希望へと読み替えているようにも思えることを言う。

繰り返しになるが、基本的にはブラジル系教会は閉じたECである。しかしながら、日本生まれの子ども世代の誕生と彼／

彼女らの語学能力と宗教的・文化的知識の欠落の問題により、信徒側・教団側共に新たなストラテジーを模索する可能性もある。しかもリーマンショック以降の不況の長期化とそれに付随するブラジル人学校の苦境と公立学校への転入が進み、子どものバイリンガル化・日本語モノリンガル化が急速に進展する可能性もある。ペンテ派の場合、事例のように信徒側に「同じキリスト教だから」として日本の福音派教会への参入も考えられるし、日本に教団が存在しない心霊主義教団ならば、日本語を取り入れる動きが進展していくのも理解可能である。いずれにせよ、これからも対象への実態調査と先行研究に照らした分析視角の彫琢を間断なく行う必要があるだろう。

中華系キリスト教会の東アジア展開

藤野陽平

日本の華僑・華人キリスト教は中華アイデンティティを強く持つ北京語系の教会と、中国からの台湾独立を目指す台湾語教会に分類できる。両者は政治性とエスニシティを連動させて、サブ・エスニック・チャーチ化しているが、こうした政治的エスニシティとは別の動きをする教派が存在する。こうした教派は中華圏で設立・発展した教派が多く、独立教会と位置づけられる。本発表では東アジアにおける独立教会の代表的存在である真イエス教会の東アジアでの展開をとりあげ、現代日本における移民と宗教の特徴を考察したい。

真イエス教会はペンテコステ運動の影響を受けた北京発祥(一九一〇)の教会だが、日本統治期の台湾に伝わり(一九二六)、さらに在台的日本人へ宣教した(一九二七)。そうした日本人信者が大阪に持ち帰った(一九四二)ところ、朝鮮半島出身者に伝わる(一九四二)。彼は戦争末期に朝鮮半島に戻り、独自に宣教(一九四五)、当初、韓国語も不得意かつ台湾の総会の援助もなく困難を伴ったが、一定数の布教に成功した(一九四八)。その後台湾総会と韓国総会の連携が始められることとなる(一九六四)。現在では韓国の総会は、地下教会とされ中国の国内法では違法である中国大陆の真イエス教会(地下教会)と台湾の総会よりも積極的に交流している。日本では戦後台湾からの日本人信者の引き上げとともに、各地で活動をはじめめる。後に大阪教会は閉鎖的な教義に反発し、教団を離脱。それ以外の日本の教会は中国人・台湾人の教会化するか、日本人による教会は活動停止状態となっている。

日本における真イエス教会は日本人が集う大阪教会(信徒約八〇名)、前橋教会(一〇名)。中国人が集う墨田教会(二五〇名)、台湾人が集う東京教会(一〇〇名)などが活動中で、教会ごとにエスニシティを反映している。韓国の教会は教会数三二、信者数二六一三で、台湾以外の各国における真イエス教会では最大のものであるが、キリスト教が盛んな韓国では広く知られた存在とはいえない。こうした韓国の真イエス教会であるが、台湾総会との関係をみると、韓国にも神学校があるのだが、牧師に該当する牧者の多くは台湾の神学院に数年間の留学を経験し、中国語を扱う。また、台湾総会も表立って接触を取